いっぷく

まごころ銘茶　狭山園だより

令和４年５月

昨年11月、第75回全国茶品評会の深蒸し煎茶の部で松下農園の茶が農林水産大臣賞を受賞した。「有機で賞が取れるのか」これが周りからの最初の反応だった。もちろん有機栽培茶が別枠で審査されるわけではない。審査員の前にはただ番号札の付いたお茶が並び、減点方式で審査が始まる。その結果、今回最高点が付いた茶が松下農園の有機栽培茶だった。

「4月12日頃に摘んだ芽です。少量なので農協で一番小さい機械を借りて仕上げたんで厳密には有機栽培茶とは言えないんですけど、有機認証の畑で採れた茶に間違いないです」と息子の彰さんは胸を張る。「有機やりたいから指導してくれよ」と言われることも多いが、畑によって事情も違ってくる。「採れなかったじゃないか」と言われても責任はとれない。松下さんも一つずつ経験を積んでここまでやってきた。

「風邪をひくと病院に行って、薬をもらって早くなおそうとするけど、風邪をひかない体を作っていこうっていうのが有機栽培です。時間もかかるから、よっぽどの変わり者じゃないとできません。有機だと虫にやられるのは当たり前。だからみんな農薬を使うんだけど、使う使わないはそれぞれの生産者が決めればいい。僕はただ農薬が好きじゃなかっただけですよ。ただ農薬をかけてないからといって高く売れるわけじゃない。買ってくれる人がほんとうに美味しいと思ってくれなくては売れない。だから今回の受賞は励みになります」と芳春さんは言う。

茶が虫にやられれば品質は落ちる。だれもが良いお茶を作ろうと努力をするが農薬を使っていく方が近道にはなる。だからより以上に今回の有機茶の受賞に関心が集まった。確かにうまいお茶を作るには、よりよい肥料が必要になる。魚カスなどの有機肥料は高くつく。茶農家の収益が減ってきて、もっと安い化学肥料に変えざるをえなくなってくると目に見えて味は落ちる。

「自然や植物が本来もっている力をどうやって引き出すかが農家の仕事。でもだれもなかなかやれない。やれないから止めちゃうのか、それでもやるのかどっちかですよね。お茶が大好きでやる気もあるんだけど、これじゃ子どもを育てることができないってやめていくのもいる」とちょっと危惧しながら芳春さんは話す。

今回、掛川市は深蒸し茶の部門で2年連続の産地賞を受賞した。掛川は茶作りに適した気候や風土に恵まれていて、明治時代から代々続く先人たちからの教えもあると芳春さんは考えている。かつて500くらいあった茶工場も今は50くらいになってはいるが、まだ全国的に見れば茶作りの人口は多い。多ければそこで育まれる切磋琢磨もまた力になる。時間があると他人の畑を見に行く。「あいつおかしな事やってるけど、いいなこの畑の作り方は」とお互いに見てないようでよく見ているらしい。

●

私が初めて松下農園を訪ねたのは23年前の春。まだ43歳の芳春さんは、失敗を重ねながらも有機栽培の茶作りに夢中になっていた。小笠山に新しい茶畑を開墾したときの、あのうれしそうな松下さんの笑顔は今も忘れられない。でも一年間必死に世話した畑が新茶前の霜で一晩にして茶色く変わった姿も見た。原発事故の時は、自分の力ではどうしようもない現実に直面することにもなる。

まだまだ

静岡県
掛川市　松下農園
松下芳春

「やってみていい方に転ぶも、悪い方に転ぶもやってみなけりゃ分からない」次世代の茶農家にその余裕がないことに気を病む。数年前、松下農園の茶工場のほど近くに『カフェ teatime まるは』をオープンさせた。高い天井と大きな窓、裏山に咲く花を眺めながらゆったりとした気分でお茶が楽しめる。松下農園のお茶や抹茶、奥さん手作りのお菓子も登場する。なぜカフェを…

「今、お茶を淹れて飲むという文化が消えかかっています。若い人も含めてお茶との出会いの場所をつくっていきたいんです。ここがそんなところになればいいなと思ってます」。

そして松下さんの挑戦はまだまだ続く。新しく建った工場では、お茶を使ったリキュール『Chanpan』の製造が始まる。今年中には販売を始めたいと意気込む。なんとしてもお茶の文化を次の世代につなぎたいという思いが伝わってくる。

かつて松下さんが私を最初に連れて行ってくれた池の谷の茶畑に立ってみた。細い山道を登ると、あの時と同じ風景が広がっている。鳥の鳴き声と風の音…林に囲まれた茶樹は芽吹きの時を待っている。ふと目を上に向けると、30センチほどの新しい苗木が育っていた。まだ植え替えて3年目の頼りなげの樹だ。もう一つ格上の碾茶（抹茶の原料の茶）を作るための新しい品種を植えた。この十数年で松下農園でも抹茶の生産比率が増している。お茶の消費の傾向も少しずつ変わってきたようだ。5年後にこの新しい苗木から採れる茶を楽しみに待ちたい。そのとき、お茶を取り巻く環境もまた少し変わっているのだろうか。